

日本文化は、外来の文化を取り込み「自国風」「日本風」にアレンジし膨らんでいく文化である。

たとえば、大陸由来の「漢字」を日本風アレンジして「仮名文字」という流麗な書体に展開させ、和歌や日記をしたためる文化が発達した。

その他、仏像彫刻や水墨画等々、外来の文化は日本列島に入ると、およそ穏やかに和やかに仕上がっていく。

こうした日本文化の気質において、最も興味深いものといえば、おそらく、「戦いの文化」に関してであろう。

日本列島に戦いが持ち込まれたのは、今から2400年ほど前。戦いの文化が無かった日本列島に、中国大陸や朝鮮半島を経由して戦いが流入した。その時、「武器」は「稲作」とセットでやってきた。

縄文人はこれを受け入れ、渡来人らとともに稲作の村を作り、武器作りにも手を染め、集団的な殺人に参加するようになった。ここに日本列島の戦いの歴史が始まった。

以来、数知れないほどの戦いが繰り広げられ、戦いの文化は、日本列島にあらたなストーリーを展開させた。

さて、あらゆるものを穏やかに和やかに「日本風」にアレンジする日本文化であるが、この「戦いの文化」は、その後どのようにアレンジされたのであろうか？

物事の解決手段として、あるいは欲望達成の手段として、集団的に人を殺す技は、約2000年後の日本列島で、「武士道」という哲学とも宗教ともいえる「道」に高め上げられていた。

人を殺す、という行為を、精神修養という域に高め、勝って奢る心を何より疎み、敵に礼を尽くすという作法まで導き出した。江戸社会において、「武器」と「礼節」はセットで流布し、多くの武人がそれに従っていた。

日本とは、つくづく和の国である。世界に例を見ない、類まれなる和の国なのである。

挿絵：久能山東照宮 狛犬阿形

